コミュニケーション紀要
Vol. 31, pp. 201-210（2020 年 3 月）

精神共同体の発達

（『心理学概論』（1897）第 21 章，著者と共同でチャールズ・H・ジャッド英訳）

ヴィルヘルム・ヴント 著　後藤　将之 翻訳

〔はじめに〕

以下は，Wilhelm Wundt, “Development of Mental Communities,” Chapter 21 of the book *Outlines of Psychology,* translated with the cooperation of the author by Charles Hubbard Judd, Wilhelm Engelmann, 1897. の翻訳である．

ヴィルヘルム・ヴント（1832-1920）は，科学的な実験心理学の始祖として，またライプツィッヒ大学に世界最初の心理学実験室を開設したことによっても，学説史的によく知られている．ただし，ヴントの学問の体系的な紹介は，その業績が非常に多岐にわたる大量のものであることもあって，それほど充分には行われていないとも言われている．その業績中，しばしば社会心理学や社会学に影響したといわれるのは『民族心理学』全 10 巻だが，これも他言語へは翻訳されていないようだ（要約版の方は翻訳紹介されている）．もちろん周知のように，当時，アメリカを含む世界の学者の一定数がヴントの研究室と実験室への留学（いわゆる「ヴント参り」）をして，彼の学問に触れている．数冊の要約版は英訳もされており，アメリカの社会科学へは，これらの英訳テキストが影響を与えた側面もあるようだ．

本論は，弟子の教育心理学者チャールズ・ジャッドが著者と共同で英訳したとされる『心理学概論』（1896 ドイツ語版初版，1897 英語版初版）の第 21 章「精神共同体の発達」を英訳から和訳したものである．訳者はアメリカ行動科学の学説史を研究してきたが，ヴント心理学の専門家ではない．訳者がこれを訳出した理由は，この部分が当時アメリカの学界で広く読まれ，たとえば訳者の研究するアメリカ社会心理学の始祖の一人，G・H・ミードの「談話宇宙」universe of discourse の概念を触発したといわれるためである．

また，この 1897 年版の 21 章において，すでに social psychology の語が使用されていることも，一定程度先駆的であり，学説史的にも意味があるだろう．この用語を最初に章題中で用いたとされる Gustav Adolph Lindner の 1871 年の著作には遅れるが，どちらも 1908 年刊行の，しばしばこの語を書名とした最初の著作とされてきた Edward A. Ross および William McDougall の *Social Psychology*（という用語を書名に含む著作）からは約 10 年先行して，この用語が英語圏で用いられていたことになる（cf.: Gustav Jahoda, *A History of Social Psychology*, 2007:58-59.）．

筆者の手元には，翻訳の底本とした上記英語版初版に加えて，1907 年刊行の英語版改訂 3 版（ドイツ語版改訂 7 版の英訳）がある．この 3 版では，この 21 章末尾に，初版からある「C．慣習」に続けて「D．社会心理学における発達研究の一般的性格」という項が追加されており，いっそう「社会心理

学」の語を強調している．ただし，各版中での「社会心理学」をめぐる記述のより詳細な比較などは別稿にゆずる．なお，英語初版のこの 21 章の節の本文中での表示には，目次での節の表示との食い違いがあり，誤記と考えられる．ここでは修正して示している．

本書『心理学概論』には，すでに明治 31-32（1898-1899）年に，元良勇次郎・中嶋泰三訳による翻訳がある（国会図書館デジタルコレクションに収蔵．近年，現代語表記で再刊されたというが未見）．とはいえ筆者のアメリカ行動科学史的な興味からの翻訳にも意味はあると考え，未熟ながら訳出した．「統覚 apperception」など，ヴントに独特な概念が多用されているが，共同体における発話，神話，慣習の発達を説いた部分は，今日でも検討に値する先駆的な発想だろう．

なお，本書は 19 世紀末の刊行物であり，インターネット上で原著の全文が掲載されていることも多く，翻訳版権を取得する性質の原書ではないと判断されたため，過去の版元からの明示的な許可は得ずに翻訳して公表する．

1．人間と動物の共同体の相違

子供の心的な発達が環境との相互作用の結果であるのと同じように，成熟した意識は，それが受容的かつ能動的な役割をその内部で果たす精神共同体と絶えず関係している．大部分の動物には，このような共同体はまったく存在しない．動物の結婚，国家，および群れにあるのは，精神共同体の不完全な先駆だけであり，概してそれは何か単一の目的を達成することに限定されている．より持続的な形態である動物の結婚と，間違って呼ばれている動物の国家（p. 279 を参照［原著における頁：訳註］）とは，実際には性的な共同体である．いっそう遷移的な形態，つまり群れは，たとえば渡り鳥の群れであるが，防護のための共同体である．これら全ての事例において，一定の本能が伝達を通してさらに固定化され，個体を一緒に保っている．したがってこの共同体は，本能一般と同様の定常性を示し，個体の影響によっては，ほとんどまったく修正されない．

このように，動物共同体は個体の存在の単なる拡張にすぎず，生理的に重要な何らかの目的に向けられている．だが，人間の発達は，当初から，個人をその精神共同体と結合させて，全体が発達することを可能とさせ，生命体の生理的欲求を充足させると同時に，もっとも多様な精神的目的の追求を，しかもその目的の大きな変化をも認めながら，行わせようとする．結果として，人間社会の形態はきわめて可変的である．けれども，より充分に発達した形態は，歴史的な発達の持続的な連続となる．それは，直接の空間的時間的に近接した境界をほとんど無限定に超えて，個人を結びつける精神的な紐帯を拡張していく．この発達の最終結果は，大きな一般的な精神共同体としての人間性 humanity という概念の形成であり，それは，人生の個別条件にしたがって，個々の具体的な共同体，人民，国家，さまざまな文明社会，人種，そして家族に分かれている．したがって，個人が属する精神共同体はひとつではなく，精神の結合の変動していく多数性であって，きわめて多種多様なやり方で絡み合い，発達が続くにつれて，さらに非常に多数になる．

2．人間共同体の産物

これらの発達を，その具体的な形態において，あるいはその一般的な関連においても跡づけるという問題は，文明史と一般歴史に属しており，心理学には属していない．それでも我々はここで，個体の生活と社会的な生活を区別する条件から生じている一般的な心的条件と心的過程とを，なんらか説明しなくてはならない．

あらゆる精神共同体の始まりにおいて第１に重要な条件，そしてそのさらなる発達において持続的に働く要因は，発話の機能である．これが，個人存在からの精神共同体の発達を，心理学的に可能とするものである．その起源において，それは，個人の表出的な動作から来るが，発達の結果，あらゆる共通の心的内容にとって不可欠の形態となる．これらの共通の内容，つまり共同体の全体に属する心的過程は，２つの類に分割できるだろう．それらは社会生活の相互に関連しあう構成要素にすぎず，個人経験における観念作用 ideation や意志作用 volition の過程よりも明瞭な過程だというわけではない．これらの類の第１のものは，共通観念 common ideas のそれであり，そこにおいて我々は，とりわけ世界の内容と意味性に関する疑問への，受け入れ済みの結論を見いだす――それが神話的観念 mythological ideas である．第２の類は，意志作用の共通動機からなりたつ．それらは共通観念とそれに伴われる感覚と情動に対応している――これらが慣習の法則である．

A．発話

3．身振り言語

個々の子供の発達からでは，発話の一般的な発達に関するどんな情報も得られない．なぜなら，ここでは，その過程のいっそう大きな部分は，当人自身ではなく，当人の周囲に依存しているからだ（p. 292 sq.）．それでも，子供がとにかく話すことを習得するという事実は，その子が，言語がコミュニケートされた時にそれを受け入れるのに好ましい心的・生理的な傾向性をもっている事を示している．それどころか，これらの傾向性は，外部からのどんなコミュニケーションもなくてさえ，音声をともなう何らかの種類の表出的動作の発達を導いたと仮定できるだろう．それが，不完全な一種の言語を形成するのである．この仮定は，聾唖者の観察により，とりわけ，いかなる体系的な教育もなしに成長した聾唖の子供の観察によって，正当化される．教育のこのような欠如にもかかわらず，彼らのあいだには，熱心な心的交流が生じるだろう．とはいえこの事例では，聾唖者はただ視覚的なサインを知覚できるだけなので，その交流は，有意味な表出的動作の組み合わせからなる，一種の自然な身振り言語 gesture-language の発達に依存しているはずである．概して，感情は模倣的 mimetic な動作によって，観念は身振り的 pantomimetic な動作によって，表出される．指で物を示すとか，空中にその観念についての何かの絵を描いてみせるというような，つまり指示的 indicateive または描写的 depicting な身振りによって，である（p. 173）．連続する一連の観念に対応する，こうしたサインの組み合わせすらあるだろう．かくして，どの物が描写されどの出来事が語られるかによって，一種の文章が作り出されるだろう．けれども，この自然な身振り言語は，具体的な知覚できる観念とその結びつきのコミュニケーションという以上には，決して進まない．抽象概念のためのサインはまったく欠けている．

4．文節言語の一般的な発達

文節言語の原初的な発達は，このような自然な身振り言語の発生が類推されて以後に，はじめて想定できる．唯一の相違は，この場合には，聞き取る能力によって，模倣的および身振り的な動作に，第３の動作形態が追加されるということである．それが発声的動作 articulatory movements である．それは，いっそう容易に知覚でき，また格段に多くの多様な変容ができるので，当然ながら，すぐにその他を重要性で凌ぐことになる．しかし，ちょうど模倣的および身振り的な動作が，動作の性格とその意味の間にある直接の関連性によって理解可能となっているのと同様に，ここでもやはり我々は，同様の関係性を，元々の発声的動作とその意味の間に前提しなければならない．したがってまた，発声化が，当初は，それにともなう模倣的および身振り的な動作で補助されていたというのもあり得ないことではない．この見解への証拠としては，未開人におけるこのような身振りの無制約な使用があり，それが子供の話すことの習得に果たす重要な役割ということがある．したがって，文節言語の発達は，分化 differentiation の過程としてしか考えられないものである．そこでは，発声的動作が，当初それにともなっていた一連のさまざまに変化する表出的動作に対して，次第に永続的な優位性を得てきた．そして，それら自体が充分な定着度を獲得するや，そうした補助的な動作はなくてもよくなったのだ．心理学的には，この過程は，２つの行為に分割できるだろう．第１は，共同体の個々の構成員による表出的動作からなる．これらは衝動的な意志作用の行為であり，そこにおいて発声器官の動作が，個人が仲間とコミュニケートする営為において，それ以外に対する優位性を得る．第２は，後続する音と観念の連合からなる．それは次第にいっそう固定化され，それが発生した中心から，社会のいっそう広範な輪へと拡散していく．

5．音と意味の変化

当初から言語の形成に参加し，その構成要素の持続的かつ絶え間ない変容を生み出している他の生理学的・心的な条件がある．このような変容は，２つの類に分割できる．すなわち，音の変容と意味の変容である．

最初の類は，発声器官の生理的構造に生じる漸進的な変化に，その生理学的な原因をもっている．これらの変化は，少なくとも相当程度まで，生理的または心理 - 生理的に条件づけられている．それは，一部は，未開人から文明人の条件へと推移することが，生理的組織にもたらした一般的な変化からきたものであり，また一部は，発声的動作の実行という実践が増加したことから帰結した特殊条件からきたものである．多くの現象が示しているのは，文節化が次第に急速になることが，とりわけ大きな影響をもったことである．したがってまた，何らかの点で相似な語が相互に影響しあって，連合の心的要因への干渉を示している．

音の変化が語の外部形態を変容させるように，意味の変化はその内部内容を変容させる．語とそれが表明する観念との当初の連合は，別の異なる観念での置き換えによって修正される．この置き換えの過程は，同一の語について何度か繰り返されただろう．したがって，語の意味の変化は，ある語が聞かれたり語られたりする時に，意識の凝固点 fixation point に生じる観念的な連合を決定している連合条件

の，漸次の変容に依拠している．したがって，それは，文節音にむすびついた複雑化の観念的な要素におけるシフトだと短く定義できよう（p. 234）.

語の音と意味のこのような変化が一緒に作用して，音と意味の当初は必然的だった関係性を，次第に消滅させる．このことで，ある語は，最終的に，観念の単なる外部的サインにすぎないとみなされるようになる．この過程はきわめて複雑であり，この関係性がいまだ維持されているとみえる言語形態であるオノマトペ的な語ですらも，そのほとんどが，音と意味の間の失われた親和性の再樹立をもとめる，比較的あとに起きた２次的な同化過程の産物に見えるほどである.

音と意味の変化の，このように組み合わさった行為がもつ，もうひとつの重要な帰結は，多くの語が次第にその当初の具体的に知覚できる意味性を完全に失って，一般的な概念の記号や，統覚的apperceptiveな関連づけと比較の機能とその結果との表出手段になっていく，という事実に見いだされる．このようにして，抽象思考が発達する．それが依拠する語の意味の変化なくして，このことは起こりえない．そしてそれは，したがって，心的および心理 - 生理的な相互作用の産物であり，そこから言語の前進的な発達が結果する.

６．語の順番の心理学的な意味

ちょうど，言語の構成要素つまり語が，音と意味の持続的な発達をこうむるように，同様に，ただし一般にはいっそうゆるやかに，これらの構成要素の完全な全体への組み合わせにも，つまり文にも，変化が生じている．いかなる言語も，何らかの，このような語の統語的な秩序なしに考えられない．したがって文と語とは，思考の心理学的形態と同じように，原初的なものである．ある意味で，文はいっそう早期だとすらいえる．というのも，とりわけ，より不完全な言語の段階では，ある文での語は非常にあいまいにしか識別できないので，文の全体が表現する当初から一体的な思考を分解した結果にしかみえないからである．語の秩序には，音と意味の関係にみられないのと同じように，普遍的な規則はない．概念の相互的な論理的依存関係という，論理が好むような秩序には，心理学的な普遍性はない．それどころか，それは発達の相当に後期の産物にみえるが，このことは，部分的には，恣意的な規則によるものであって，統語的にほぼ固定された何らかの現代語の散文形式からアプローチされているからである．語の統覚的な組み合わせにおいて辿られた当初の原理は明らかにこれであり，語の秩序は観念の継起に対応するということである．とりわけ，もっとも強固な感情を喚起した，注目を集める観念を代表する話の部分こそが，冒頭に置かれる．この原理にしたがって，語の秩序における一定の規則性が，特定の共同体において発達する．それどころか，このような規則性は，聾唖者の自然な身振り言語においてすら観察される．さらに，この関連でのもっとも多様な変容は，特別な環境下で現れ，また，このような変容の起こりうる範囲が非常に広いこともたやすく理解できる．とはいえ，概して，連合の習慣によって，一定の硬直性が通常は結果するような，特定の統語的な形態への固定化がいっそう起こりやすくなる.

関係づけと比較の一般的な心的機能から生じるものとして，統覚的組み合わせの議論において示された一般法則（p. 264）とは別に，統語的組み合わせの特徴とその漸次の変容についての詳細な議論は，

その心理学的な重要性にもかかわらず，社会心理学に残されねばならない．というのも，それらは，特定の共同体の中の文明の固有の傾向と条件に，きわめて依存しているからである．

B．神話

7．人称化する統覚

神話の発達は，言語の発達と密接に関連している．神話的思考は，間違いなく，言語そのものと同じように，人間意識の中で決して失われていない一定の属性に基づいている．それでもこれらの属性は，多様な影響力によって変容し，限定される．多様な行為の形態であらゆる神話的な観念を生じさせる根本的な機能として，我々は，特徴的な種類の統覚をもっている．それは，すべての素朴な意識に属しており，適切にも，人称化する統覚 personifying apperception という名称で指示されている．それは，知覚する主体の性質を通しての，統覚的対象の完全な決定からなる．主体は，当人自身の感覚・情動・そして対象の中に再現された自発的動作を見るだけではない．知覚された現象についての自分の見地を決定し，自分自身の存在とそれとの関係性についての観念を喚起することにおいて，当人自身の一時的な感情状態さえもが，どのような場合でも，とりわけ影響を与える．こうした見解の必然的な結果として，主体が自分自身の中に見いだす同一の個人的な属性が，対象に付与される．感覚や情動などの内的属性は決して除外されない．だが，自発的行為や，人間のその他の発現の外的属性は，一般に，実際に知覚された動作に依存している．こうして未開人は，石や草や芸術作品に，感覚と感情と，それらの結果としての効果についての内的な能力を帰属させるだろう．しかし彼は，通例，雲・天体・風などといった，動いている対象に限って即時の行為をとるだろう．これら全ての事例において，人称化は，連合的な同化に任されて，たやすく空想的な幻影の強さにまで到達する（p. 268）．

8．その発達の一般条件

神話創造的な，つまり人称化する統覚は，統覚の特殊形態とも，あるいは明瞭な下位形態だとも，みなされてはならない．それは統覚一般の自然な初発段階に他ならない．子供はたえず，その明らかな痕跡を示している．部分的には，遊びにおけるその想像の行為において，また部分的には，とりわけ恐れや怯えといった強い情動が，たやすく情動のそれと相似的な感情的性格をもった空想的な幻影を喚起する事実によって，である．けれどもこの場合，神話形成の傾向の発現は，子供の環境と教育の影響を通して，早期からチェックされ，すぐにまったく抑圧される．未開人や部分的な文明人では，このことは異なる．そこでは，周囲の影響力が，個人意識に対して，大量の神話的観念を提示する．それらはまた，個人の精神にも生じ，一定の共同体において次第に固定化され，そして言語との持続的な関係の中で，この後者と同様に，世代から世代へと伝播されて，この転移の中で，未開人の条件から文明人のそれへと変容していく．

9．アニミズムとフェティシズム

このような変容がとる方向は，概して，主体の情動的な状態が，神話創造的な統覚の性格を設定する

にあたって主要な影響力となるという，上に指摘した事実によって決定されている．主体の情動的な状態が，精神発達の最初の始まりから現在まで，どのように変化してきたかについて何らかの認識を得るためには，我々は，神話的観念の発達史に訴えなければならない．というのも，その他の証拠がまったく欠けているからである．全ての事例において，最初期の神話的観念は，一方では直接の個人的な未来の運命に言及しながら，他方では仲間の死やその記憶が喚起する情動によって，また夢の記憶によって，非常に高度に，決定されているようにみえる．これがいわゆる「アニミズム」の源泉である．すなわち，そこにおいて，死者の魂が運命の制御者の役割を果たして人間生活に禍福をもたらすような，あらゆる観念のことである．「フェティシズム」とはアニミズムの分派である．そこでは，運命を制御する能力という属性は，環境内のさまざまな対象に持ち越される．つまり，動物，植物，岩石，芸術作品，とりわけそれらの印象的な性格や偶然の外的な物々しさゆえに注目を集める物体などに，である．アニミズムおよびフェティシズムという現象は，もっとも初期からのものであるのみならず，もっとも持続的でもある神話創造的な統覚の産物である．それらは，他の全てが抑圧された後ですらも，幽霊や魔法や魔力などを信じることのように，文明人の間でも，さまざまな迷信の形態で持続する．

10. 自然神話

意識がいっそう進歩した段階に到達すると，人称化する統覚は，その変化とその直接影響の両者を通して，人間生活に作用するより多くの自然現象を扱うようになる．雲，川，風，さらに大きな天体といったように．一定の現象の規則性，つまり夜と昼や冬と夏の変化，雷雨の過程などといったことが，詩的神話の形成される機会を与える．そこでは相互に結びついた一連の観念が，ひとつの結束した全体へと織り上げられる．このようにして自然神話が生じる．それは，まさにその性質からして，個々人がもつ，それをさらに発達させる詩的能力を刺激する．こうしてそれは，次第に，通俗的な，そして文学的な，詩の構成要素となって，単一の神話的人物の特徴のいくつかの消失と，その他の新しい特徴の出現を通して，意味の変化をこうむる．この変化が今度は，神話の進歩的な内的変化を可能とする．それは，そこにいつでも伴われる語の変化と相似している．この過程が進行すると，単一の詩人と思想家が，次第に大きな影響力を獲得する．

このようにして，神話的思考の全内容が，次第に，科学（哲学）と信仰へと分化していき，同時に，信仰の中の自然神 nature-gods が，神性という倫理的な観念をさらに生じさせる．この分化が生じた後には，２つの部門は，多くの重要なやり方で相互に影響し合う．それでも，これらの事実は，社会心理学と文明史に残されねばならない．というのも，これらは，一般的な心理学的法則によってと同様，固有の社会条件の見地からも議論されねばならないからである．

C．慣習

11. 神話との関係

慣習の発達は，外的な意志的行為が内的な動機と関連するのと同様にして，神話の発達と関連している．我々が，古代の広範囲に広まった慣習の起源を，どの程度の蓋然性でどこに追跡できても，我々は，

それが，一定のカルト形態の遺物または修正物なのを見いだす．こうして文明人の葬祭と埋葬儀式は，一種の原始的な祖先崇拝を示している．無数の祭祀と儀式とが特定の時代と結びつき，季節の変化や農地耕作や収穫集めと結びついて，すべてが自然神話を示している．さまざまな形態での挨拶の慣習は，祈祷儀式からそれが直接に引き出されたことを示している．

このことは，とりわけ実用的な効用のある動機など，他の動機もまた，当初は個人的な慣習だったものを生じさせ，しかし次第に共同体全体に拡散させ，かくして慣習的な法則にした，という可能性を排除するものではない．とはいえこの発達の顕著な特徴は，次の事実である．つまり，原始的な慣習は，たとえば画一的な制服を着たり，決まった時刻に食事するなどといった習慣のように，たまたま実用的なニーズにかなうものであっても，多かれ少なかれ，特定の神話的観念にまだ依拠している，ということだ．じっさい，意識が神話創造的な統覚の完全な制御のもとにあるときに，それは，それ以外として考えることが難しいであろう．

12. 慣習の意味の変化

言語に対してと同じく慣習に対しても，意味の変化は，その発達を修正する影響をもたらしてきた．この変化の結果として，２つの主要な種類の変容が生じた．第１に，原始的な神話的動機は失われてしまい，いかなる新たなそれも，取って変わらなかった．慣習は，連合の習慣の結果として持続するが，その命令的な性格を失って，その外的な顕出ははるかに弱まる．第２の類の変容では，原始的な神話 - 宗教的動機が道徳 - 社会的な目的にとって変わられる．２種類の変化は，どんな個別事例でも，もっとも緊密に結びついている．そして，ある慣習は，たとえば衣装や食事などのマナーでの一定の行儀やエチケットの規則のように，いかなる固有の社会的な目的にも直接にかなっていない時でさえ，間接的にであっても，共同体構成員にとっては何らかの共通規則が彼らの結びついた生活にとって望ましく，したがって彼らの共通の心的発達にも好ましい，といった意味で，このことをしているだろう．

13. 慣習，法，そして道徳性への分化

指摘した慣習における心理学的な変化が，その３つの領域への，つまり慣習，法，道徳という領域への，分化を用意するものとなる．最後の２者は，道徳 - 社会的な目的に向けた慣習の特別の形態とみなされるだろう．とはいえ，慣習一般の心理学的な発達と分化の詳細な探究は，社会心理学の問題である．そしてまた，法と道徳性の成立についての検討は，一般的な歴史と倫理学に属している．

14. 集合意識と集合意志

我々は，ここにおいて，精神共同体の中に，それもとりわけそこでの言語，神話，慣習の発達の中に，精神的な相互連結 interconnections と相互作用 interactions とをもつことになる．それらは，本質的な点において，ある個人意識内での心的構成要素の相互連結とは異なるが，それでも，その個人意識そのものと同じ程度の現実性をもっている．この意味で我々は，観念の相互連結と社会的な共同体の感覚のことをひとつの集合意識として，また共通の意志作用的な傾向のことを集合意志として，語ることがで

きるだろう．これをするにあたって我々が忘れてはならないことは，共同体それ自体も個人の結びつきのかたわらにある何かであるという以上には，これらの概念も，個人の意識的および意志作用的な過程を離れて存在する何ものかを意味してはいないことである．とはいえ，この結びつきは，言語，神話，慣習といった，その胚芽だけが個人の中に存在する一定の心的産物をもたらし，また，ごく早期から個人の発達をも決定するのであるから，個人意識がそうであるのと同じほどに，心理学の対象でもある．というのも心理学は，集合意識と集合意志の産物と属性とを生じさせる相互作用を説明しなければならないからである．

14 a．批判的指摘

精神共同体の存在から生じる事実は，心理学的探究の領域内へは近年入ってきたにすぎない．これらの問題は，かつては，専門の精神科学（言語学，歴史学，法学など）か，あるいはいっそう一般性な性質については，哲学つまり形而上学に任されていた．心理学がそれに触れることがあったにしても，それは，個別科学や歴史学や法学などでそうだったように，通俗心理学の内省的方法に支配されていた．それは，あらゆる共同体の心的産物を，できる限り，当初から一定の功利的な目的をめざしている自発的な発明と扱おうとした．この見解は，その主要な哲学的表明を，社会契約の学説に見いだしている．それによれば，精神共同体とは，元からあるのでも自然なものなのでもなく，一定数の個人の自発的な結びつきから引き出されたものである．この立場は心理学的には擁護できないし，社会心理学の問題の前ではまったく役に立たない．その余波のひとつとして，我々は今日でも，集合意識と集合意志の概念について，著しい誤解をしている．それらを，共同体における個人の実際の合意と相互作用の表明だと単純にみなすかわりに，それらの背後には，何らかの種類の神話的存在が，あるいは少なくとも，ある形而上学的な実体が存在するのではといまだに考えている人々もいるのだ．

A Japanese Translation of "Development of Mental Communities," Chapter 21 of the book *Outlines of Psychology* by Wilhelm Wundt, 1897

Translation by GOTO Masayuki

Abstract

This is a Japanese translation of the title article by German philosopher and psychologist Wilhelm Maximilian Wundt (1832-1920). The English version here translated into Japanese was a collaborative translation from the German original (1896) by American psychologist Charles H. Judd, one of his disciples, and Wundt himself, and was widely read among American philosophers, psychologists, and sociologists in the early to middle 20th century.

Still now important seems to be this Chapter 21 of the volume, which discusses the development of "Mental Communities," a Wundt's original term, among human beings, with this concept of "mental community" having had strong influences on such American social theorists as George H. Mead. It is often asserted that Mead's original conception of "The Universe of Discourse," a world of shared symbols taken for granted by all community members, was directly influenced by Wundt's this concept and its description shown here in the volume.

Though Wundt's entire system of thought is said to be not yet fully introduced into American social thought, some of his shorter volumes like this one were translated into English anyway, at the end and the beginning of the century, and had strong impact on early American social thoughts, including, as was forecasted in this article's concluding remarks themselves, the newly-born genre of social psychology.

This historically important and still now intriguing essay is translated into Japanese here for the second time, the first time being Yujiro Motora and Taizo Nakajima's translation of the title published in 1898-1899 (Meiji 31-32 year) in Japan.